
病みつきなのはシリーズ

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつきなのはシリーズ

【Nコード】

N6385X

【作者名】

勲b

【あらすじ】

私が書いた『病みつきなのは』と『病みつきティアナ』の纏めです。

連載オリジナルの話も書きます。

彼女————高町なのはは彼を見る。

自分のものにならない彼を――――

彼女――――ティアナ・ランスターは彼を見る。

かつては自分のものになり、今は違う彼を――――

『追憶の記憶を示す物語』

注意事項（前書き）

要望が合ったからやった

後悔してたらキリがないため後悔しないことにした。

注意事項

こんにちはー勦bでーす

この連載は私が書いてる『病みつきなのは』と『病みつきティアナ』の纏めです。

時系列どうりに載せます。

時系列は

病みつきティアナ⇨病みつきティアナ⇨裏話⇨↓病みつきなのは
⇨↓病みつきなのは⇨裏話⇨↓病みつきなのは⇨後日談⇨↓病みつきティアナ⇨後日談⇨

と、なります。

各裏話の次はその後の話を少し書くつもりでいます。

後日談の次も書くつもりです。

ティアナ後日談投稿後は最後の話として『病みつきなのは⇨終章⇨』を投稿します。

短い期間になると思いますが、付き合ってくれたら嬉しいです
！！

P
S
感想くれたら嬉しいです!!

病みつきティアナ（前書き）

この物語をあなたは知ってるだろうか。

あの日、俺は風邪で倒れてたんだ。

そんな俺を彼女は看病してくれた。

それだけ――

それだけで終われば良かったのに。

これがきっかけで、彼女達は変わった。

変わってしまった。

誰が悪いといえば、俺になるのかもしれない。

何も出来なかった俺が悪いのかもしれない。

……これ以上言うのは止めるとしよう。

まあ、なんだ……

この物語は『終わりが決まっていた2人の物語』だ。

そろそろはじまるみたいだ。

―――物語のプロローグが

病みつきティアナ

俺は今自分のベッドの上で横になっている。

「本当に大丈夫なの？」

そんな俺を心配するように彼女——ティアナが言った。

「……頭が痛い」

「痛いと思える内は大丈夫よ」

……病人に対して冷たすぎだろ

俺が風邪を引いてしまったためティアナが看病してくれているのだ。

椅子に座っていたティアナが立ち上がる。

「どれどれ……？」

ティアナが俺に顔を近付けるとお互いの額を当てる。

……ティアナ、顔が近い

「……うん、朝よりも低いわね

「大丈夫？ 顔がさっきよりも赤いけど」

ティアナはからかうように言う。

「……い、いきなり何すんだよ」

俺が言うのとティアナは楽しそうな笑みを浮かべる。

「あら、嫌だった？」

首を傾げ、楽しそうに言うティアナを見つめる。

「……どうでもいい」

拗ねたように俺が言うのとティアナが立ち上がる。

「朝から何も食べてないんでしょ」

「お粥でも作ってきてあげる」

それだけ言って俺の部屋からティアナが出ていく。

——俺はティアナが好きだ

目標のために頑張っている彼女を見てたら好きになっていた。

——彼女とは付き合っていない

でも、こうして看病に来てくれるんだから嫌われてはいない。

——嫌われてはいない

今はまだ、これで満足だ。

――
あれから少ししてティアナが部屋に戻ってきた。

「遅かったな」

ティアナは俯いたままソファに座り、テーブルの上に蓋をしてある小さめの鍋を置いた。

「……ティアナ？」

何も言わないティアナを心配して彼女の名前を呼んでみる。

すると、ティアナはゆっくりと此方を向いて言った。

「さっきね、なのはさんに会ったの」

――光が無いで濁った瞳で

――俺の眼を見ながら

「そしたらね、あんたの様子を聞いてきたの
「なのはさんには関係ないことなのね

「あたしが元気ですよって言ったらなんて言ったと思う？」

「自分も看病に行くって言ったの

「……関係ないのに

「あたし1人で充分ですよって言ってもなお付いてこようとするの

「でもね、あたしが少し強く言ったらすぐに諦めちゃった

「迷惑だよ

「簡単な気持ちで人の邪魔をしようだなんて――」

ティアナは口を閉じると黙って俺を見る。

「なのはさんだって俺を心配してくれたんだろ？」

「そう邪推に扱わなくても――」

俺が言い終わる前にティアナが口を挟む。

「あんたを心配するのはあたしだけでいい

「あんただって、なのはさんのことを心配する必要ないわよ

「あたしのことだけ心配してくれば――」

ティアナがそういうと鍋の蓋を開ける。

「ほら、あたしが1人で作ったのよ

「あんたのことが心配だったから急いでね

「邪魔さえ入らなければ急がなくてもよかったんだけど――」

ティアナはなのはさんのことを思い出したのか、一瞬地面を睨むとすぐに視線を俺に戻す。

「ほら、口を開けなさい」

ティアナはスプーンでお粥をすくうと、俺に言う。

……えっ？

「口を閉じてたら食べられないわよ」

ティアナの唐突な行動に戸惑い、動けない俺に言う。

「……それとも、私のじゃなくて、なのはさんのが食べたかった？
「あたしが作ったのは食べたくなくて、なのはさんのが食べたいの？」」

「いや！ そんなんじゃないって！！」

俺を睨むティアナに慌てて言う。

「自分で食べられるから、そういうのはいらないんだけど……」

「病人は大人しく言うこと聞きなさい」

俺はスプーンを見る。

……ていうか

「なあ、ティアナ

「何でこのお粥は赤いんだ？」

———そう

ティアナが作ってきてくれたお粥が赤いのだ。

以上なまで……とは言わない、ほんのり赤い程度だ。

「味付けを辛くしたのよ」

……辛くする意味がわからない

……でも、好きな人が作った料理を食べれるどころか、食べさせてくれるなんてチャンスはもう来ないかもしれないし――――

俺は口を開ける。

ティアナはそれを見て、嬉しそうな笑みを浮かべながら俺にお粥を食べさせてくれた。

「フフフ……」

嬉しそうに笑いながらティアナは俺を見る。

「美味しい？」

ティアナは笑みを浮かべたまま俺に聞く。

「美味しいよ」

少し辛い気がするが、それ位が丁度いい。

俺が言うと彼女の笑みが深くなる。

「あんたの大好きなものを少しだけ入れたんだもの、気に入って当然よね」

大好きなもの？

……何を入れたんだろうか

ティアナに聞こうとしてみるが、そんな俺の前にスプーンが現れた。

「あーん」

楽しそうに笑いながら言うティアナ。

……俺をからかって楽しんでるな

俺は大人しくティアナの言うとおりにする。

———まあ、いっか

———

ティアナが作ってくれたお粥も大分少なくなってきた。

ティアナがスプーンを俺の前に運ぶ。

それを確認して俺は口を開ける。

———だが

ティアナはスプーンの動き止める。

すると、なにを思ったのかスプーンを自分の口に運んだ。

俺が口を開けたまま止まっていると、ティアナの両手が俺の両頬を優しく包み込む。

——そして

——ティアナの顔が俺に近づいてきて

——ティアナが俺とキスをした

……っ!?

俺の口の中になま暖かいものが押し込まれてい。

何がおきたのか考えているほど余裕が無い俺とは別にティアナはゆっくりと俺から離れる。

「美味しかった?」

顔を真っ赤にしながらティアナは言う。

「な、なんで!？」

「……もしかして、嫌だった?」

ティアナは俺の眼を見ながら言う。

「嫌じゃなかったけど——」

「そうよね、嫌なはずが無い

「私がやったんだから、嫌なはずが無い」

ティアナはそれだけ言うと思ってたスプーンを空っぽの鍋に置く。

「……いきなり口移しだなんて」

俺が言うとティアナは変わらず虚ろな瞳で俺を見つめる。

「急にしたくなったの

「こんなことするのは相手があんただからよ

「あんたは特別だから——」

ティアナは続ける。

「あんただけが私の特別なの

「誰でもない、あんただけが——

「あたしの——」

ティアナはそれから先を言わない。

俺を見つめながら黙る。

————特別

————俺だって、ティアナは特別だ

——— だったら

「ティアナ」

俺が彼女の名前を呼ぶ。

ティアナは変わらず俺を見つめる。

「俺も、ティアナのこと特別だって思ってるよ
「今までも——

「そして、これからも、思い続ける！！
「だから——」

俺はティアナを見つめ返す。

「——好きだ」

——— 特別だって言ってくれてるんだ

——— だったら、俺だって

——— 特別だって伝えたい

——— 断られてもいい、伝えたいだけ

俺とティアナが見つめ合う。

すると、ティアナが笑みを浮かべる。

「知ってたわよ」

ティアナはそう言うのと俺の頭を撫でる。

「あたしはあんたのことで知らないことなんて無い

「だって、私はあんたのこと好きだもん

「違う、愛してる

「あんたのことを——愛してる」

ティアナがそう言うのと立ち上がる。

立ち上がると、何故か俺をまたがる。

ティアナはその状態で俺に左手の人差し指を見せる。

「ほら、見て

「お粥の材料を切ってるときに怪我しちゃったの」

ティアナの指には絆創膏がはってあった。

すると、その絆創膏を外して、傷口を俺に見せる。

「少し深く切っちゃってね」

確かに傷口は少し深い。

俺が口を開こうとするとティアナは言う。

「あたしと約束して欲しいことがあるの」

ティアナは俺を見つめながら言う。

「六課解散までお互いに本気で好きな人が出来たら別れる」

……本気で好きな人？

「女のあたしからみても、六課には魅力的な女性が多いの

「あんたには、その中で私が一番だって言ってほしい

「あんたには、六課で私のことだけを必要としてほし

「——だから

「あんたが六課で本気で好きな人が出来たら、あたしは大人しく別れる

「あたしはあんた以外の人のことを好きになるはずが無から安心して」

ティアナは俺を左手の人差し指で差すと目の前に指を持ってくる。

「もしこの約束が守れるなら、私の指を舐めて

「あんたに舐めてもらえたら、怪我の治りも早いと思うし」

俺はティアナの指を見る。

血が数滴零れては俺の顔に当たる。

——ティアナと付き合うことが出来る

——俺だって、本気で好きになる人はティアナぐらいしかない

———だから

俺はティアナの指を舐める。

それを見てティアナは嬉しそうに笑う。

「フフフ……」

「舐めてくれるよね」

「だって、あんたはあたしのこと大好きだもん」

「あたしも好きだよ」

「誰よりも、何よりも」

「何時だって、これからも」

「——あんたのことを愛してる」

ティアナは指を退かすと顔を近付ける。

俺とティアナはキスをする。

———2回目のキスを

「風邪が移ったかもね」

ティアナは帰る準備をしながら言う。

「移したらごめん」

申し訳なさそうに俺が言うとティアナは笑みを浮かべながら言う。

「それで、あんたが元気になるなら別に良いわよ

「それに、あたしが風邪を引いたら、あんたが看病してくれるし

「むしろ嬉しいわよ」

それだけ言うとティアナは部屋から出ていく。

扉が閉まる前に彼女は此方を向いて言う。

「おやすみ」

「おやすみ」

ティアナに返事をすると思ふと扉が閉まった。

――――幸せな1日だった

そんなことを思いながら、俺は目を閉じた。

――――
この物語りの続きは知ってるだろうか？

知らない方のために、軽く話しよう。

六課解散時、俺の隣にいるのはティアナではなかった。

ティアナとは別れたのだ。

——本気で好きな人が出来たら別れる

——その約束に触れたのだ

——彼女のことは好きじゃない

でも、俺が傍にいないと何をするかわからない。

——だから、俺は彼女の隣にいる

彼女————なのはさんが俺の隣に笑顔でいる。

————ごめん、ティアナ

病みつきティアナ（後書き）

……さて、今回はこれで終わりだ。

どうだった、幸せなカップルができた瞬間をみた感想は。

まあ、当事者である俺からすれば涙なしでは見れない物語だな。

何故泣くかって？

それを聞くのは些か不粋じゃないかな。

まあさ、気になるなら次回も見てくださいよ。

次回の物語を案内するのは俺じゃなくて、彼女になるけど……

きっと上手くやってくれるだろう。

俺は彼女を信頼してるからね。

さて、この物語を見て続きが気になるから短編を見るつつうのは止めたほうがいい。

ここで次の短編を見てしまったら、この作品の楽しみが減ってしまう。

……さてと、俺にしては長々と喋ってしまった。

次回は彼女だが、その次は俺に戻るらしいね。

また、あなたと会えることを期待して、俺は大人しくこの場から去るとしよう。

PS 伝え忘れてたことがあった。

俺は『隊長補佐』ではないよ。

隊長補佐が気になる方は……

そうだな、宣伝になるが『病みつき六課』を見るといい。

隊長補佐は俺ではない。

なら、俺は何なんだろうね。

自分でも理解できないよ。

病みつきティアナの裏話（前書き）

私は彼と居たかっただけ

ずっと傍に――――

何時からだろう。

それだけじゃ満足出来なくなったのは。

彼に会うたびに好きになる。

彼と離れるたびに恋しくなる。

彼を見つめるたびに愛したくなる。

――この気持ちは止まらない

――――永遠に

そんな私の物語。

誰にも語る必要がない物語。

ハッピーエンドに似せただけのバッドエンドの物語――――

病みつきティアナの裏話

彼は今自分のベッドの上で横になっている。

「本当に大丈夫なの？」

そんな彼を心配するように私が言った。

「……頭が痛い」

「痛いと思える内は大丈夫よ」

……まったく、心配掛けさせて

風邪を引いてしまったため私が看病しているのだ。

椅子に座っていた私は立ち上がる。

「どれどれ……？」

私が彼に顔を近付けるとお互いの額を当てる。

……彼の顔が真ん前にある

私の彼

——私だけの

「……うん、朝よりも低いわね

「大丈夫？ 顔がさつきよりも赤いけど」
私はからかうように言う。

「……い、いきなり何すんだよ」

照れながら返事をする彼。

可愛いな

「あら、嫌だった？」

私が言うのと彼は顔を背ける。

「……どうでもいい」

拗ねたように彼が言う。

私はそんな彼を見つめながら立ち上がる。

「朝から何も食べてないんですよ」

「お粥でも作ってきてあげる」

私は彼の部屋から出る。

——私は彼が好き

——彼もきっと私のことが好き

―――相思相愛なんだ

―――大好きだよ、何時も

―――愛してる

誰にも渡さないし渡す気も無い。

―――だから

―――

「早く作らないと」

食堂に来て私は早速調理を始めた。

―――そういえば、六課に来てからあまり料理してないな

そんなことを考えながら、私は材料を切りはじめた。

「……っ!!」

材料を切っていたら軽く自分の指を切ってしまった。

……落ち着かないと

私はポケットから絆創膏を取出し切った指にはろうとする。

———待つて

私は自分の傷を見る。

———舐めてくれるかな

私は自分の傷を軽く舐める。

———彼だったら、きっと

私は他の材料を取り出す。

少し辛めのお粥にすれば、多少赤いのは誤魔化せれる。

……直接舐めて欲しいけど、いきなりは流石に

「美味しいって言ってくれるかな……」

私はお粥に自分の血を何滴か入れる。

———私の血を

———美味しいって言ってくれるかな？

――
食堂から出てすぐに、私は声を掛けられた。

「ティアナ」

声をしたほうを向くとそこにはなのはさんがいた。

なのはさんは心配そうな顔をしていた。

「どうしたんですか、なのはさん」

早く彼に会いたいのに――――

邪魔しないでほしい。

「彼は大丈夫？」

……なんでなのはさんが彼を心配するんだろ。

彼のことを考えるのはあたしだけで充分なのに。

「大丈夫ですよ」

「あたしが彼を看病してるんで」

彼のことはなのはさんには関係ないことだ。

なのに、なのはさんと言う。

「でも、やっぱり心配だよ」

「わたし、彼の様子見てくるね」

「待ってください!」

彼の部屋に向かおうとするなのはさんを私は止める。

「なのはさんに風邪が移ったら大変ですし、行かないほうがいいですよ」

「彼のことはあたしに任せて、なのはさんは自室に戻ったらどうですか?」

「でも……」

……彼を見るのは私だけでいい

それでも、なのはさんと言う。

「ティアナは今から彼の看病に行くんでしょ?

「彼も看病してもらう人が一人より二人のほうがいいと思うんだ
「だから、わたしもティアナと一緒に――」

……いない。

あたし以外の人が彼の傍に居る必要ない。

「いませんよ」

「彼だって、なのはさんが居てほしくないと思いますよ」

「……そうかな」

私が言うとなのはさんは寂しそうな表情をして俯く。

「でも！」

なのはさんは顔を上げると私を見る。

「ティアナだって訓練終わりで疲れてるでしょ？」

「だから、わたしもティアナの手伝いしちゃ駄目かな？」

「私も彼のために何かしたいの」

「……しなくていい

「いりませんよ！」

「……彼を見るのはあたしだけで充分なんだ

「彼の傍には私が居ますから、大丈夫です！！」

叩きつけるように私が叫ぶ。

なのはさんはまた俯く。

「それでは、失礼します」

あたしは黙っているなのはさんを置いて、彼の部屋に向かった。

——— 彼を見るのはあたしだけで充分なのに

何である人は邪魔をするんだろう？

——— 邪魔なだけなのに

——— あたしから彼を奪うなんて

「遅かったな」

あたしが部屋にはいると彼は言う。

返事をせずにあたしはソファ―に座り、持っていた小さ目の鍋を置いた。

「……ティアナ？」

何も言わないあたしを心配してくれたのか、彼は私の名前を呼ぶ。

……彼があたしのことを心配してくれてる。

……それでいい、彼はあたしのことだけを見てればそれで――

すると、ティアナはゆっくりと此方を向いて言った。

「さっきね、なのはさんに会ったの」

あたしが唐突に言うとは彼は首を傾げる。

「そしたらね、あんたの様子を聞いてきたの」

「なのはさんには関係ないことなのにね」

「あたしが元気ですよって言ったらなんて言ったと思う？」

「自分も看病に行くって言ったの」

「……関係ないのに」

「あたし1人で充分ですって言ってもなお付いてこようとするの」

「でもね、あたしが少し強く言ったらすぐに諦めちゃった」

「迷惑だよ」

「簡単な気持ちで人の邪魔をしようだなんて——」

あたしは黙って彼を見る。

彼は困った表情をしている。

「——なんで、そんな顔するの？」

「なのはさんだって俺を心配してくれたんだろ？」

「そう邪推に扱わなくても——」

彼が言い終わる前にあたしは言う。

「あんたを心配するのはあたしだけでいい」

「あんただって、なのはさんのことを心配する必要ないわよ」

「あたしのことだけ心配してくれば——」

ティアナがそういうと鍋の蓋を開ける。

「ほら、あたしが1人で作ったのよ

「あんたのことが心配だったから急いでね

「邪魔さえ入らなければ急がなくてもよかったんだけど――」

――なんで、邪魔をしたんだろう

――彼にしても、あたしにしても邪魔でしかないって事わからなかったのかな？

あたしはスプーンでお粥をすくい、彼に向ける。

……これぐらい、いいよね。

「ほら、口を開けなさい

「口を閉じてたら食べられないわよ」

彼は驚いた顔をしながらあたしを見る。

「……それとも、私のじゃなくて、なのはさんの食べたかった？

「あたしが作ったのは食べたくなって、なのはさんの食べたいの？」

だとしたら許せない。

あたしから彼を奪った奴を――

許しはしない。

「いや！ そんなんじゃないって!!」

彼はあわてて言う。

「自分で食べられるから、そういうのはいらなただけど……」

「病人は大人しく言うこと聞きなさい」

彼はスプーンをじっと見る。

「なあ、ティアナ

「何でこのお粥は赤いんだ？」

彼は首を傾げながら言う。

……大丈夫

あたしの血は数滴しか入ってないんだ——
流石にわかるはずがない。

「味付けを辛くしたのよ」

あたしが言うと彼は大人しく口をあける。

——彼はあたしの言うことをちゃんと聞いてくれる。

「フッフ……」

そんな彼を見てると笑みが止まらない。

「美味しい？」

あたしあがいうと彼はすぐに返事をする。

「美味しいよ」

そうよね。

だって、それにはあんたの大好きなあたしの血が入ってるもん。

「あんたの大好きなものを少しだけ入れたんだもの、気に入って当然よね」

あんたが食べたいならいつでも食べさせてあげる。

———食べてもらいたい

「あーん」

あたしが次の分を差し出すと彼は大人しく口をあける。

———何度も何度も

彼が食べるたびにあたしの血が彼の口に入っていく。

そうかんがえただけで笑みが止まらない。

彼は美味しそうに食べてくれる。

まるで、あたしの血を美味しそうに食べてくれてるみたいに———

———フフフフ……

彼に食べさせていると、お粥も残りわずかになった。

あたしはそれを彼の口に運ぶ。

———待つて

あたしは彼を見る。

そして、ゆっくりとスプーンを自分の口に運んだ。

彼が口を開けたまま止まっているのを確認すると、彼のの両頬を両手で優しく包み込む。

———そして

———あたしはは彼に顔を近づける

———あたしは彼とキスをする

驚いている彼にあたしは口移しでお粥を食べさせる。

———もう少しだけキスしていたい

でも、彼が苦しそうなため残念な気持ちはあるが、大人しく離れる。

「美味しかった？」

顔を真っ赤にしている彼に言う。

「な、なんで!？」

なんで？

決まってるじゃん、そんなの——

「……もしかして、嫌だった？」

「嫌じゃなかったけど——」

「そうよね、嫌なはずが無い

「私がやったんだから、嫌なはずが無い」

あたしは持ってたスプーンを空っぽの鍋に置く。

「……いきなり口移しだなんて」

彼はいまだに顔を真っ赤にしながら言う。

「急にしたくなったの

「こんなことするのは相手があんただからよ

「あんたは特別だから——」

——特別な

「あんただけが私の特別な

「誰でもない、あんただけが——

「あたしの——」

——大好きな人だから

「ティアナ」

彼はあたしの名前を呼ぶ。

彼に名前を呼んでもらえるのは嬉しい。

彼に呼んでもらえるだけで幸せな気持ちになる。

「俺も、ティアナのこと特別だと思ってるよ
「今までも——

「そして、これからも、思い続ける!!
「だから——」

——彼は一息つくと言う。

「——好きだ」

——言ってくれた

——好きだって

——今まで、何も言ってくれなかった彼が

——あたしの大好きな人が

——言ってくれた!!

「知ってたわよ」

あたしは強気な態度で言う。

——知っていた

でも、自信がなかった。

もし、違ったらどうしよう。

もし、他の人のことが好きだったらどうしよう。

「あたしはあんたのことで知らないことなんて無い

「だって、私はあんたのこと好きだもん

「違う、愛してる

「あんたのことを——愛してる」

何時も不安だった。

もし、違ったら——

あたしは、その人と彼に何をしてても可笑しくないから。

間違いなくその人から彼を奪うだろう。

あたしは立ち上がり、彼に馬乗りになる。

——彼ならきっと美味しいって言ってくれる。

「ほら、見て

「お粥の材料を切つてるときに怪我しちゃったの」

あたしは彼に左手の人差し指を見せる。

その指には絆創膏がはってある。

あたしは絆創膏を外して、傷口を彼に見せる。

「少し深く切っちゃってね」

あたしは彼を見る。

———愛しの彼を

———見つめる

「あたしと約束して欲しいことがあるの」

この約束はあたしにメリットは無い。

「六課解散までお互いに本気で好きな人が出来たら別れる」

彼以外の人を本気で好きになるはずが無いあたしからすれば、これはデメリットしかない。

「女のあたしからみても、六課には魅力的な女性が多いの

「あんたには、その中で私が一番だって言ってほしい

「あんたには、六課で私のことだけが必要としてほし

「——だから

「あんたが六課で本気で好きな人が出来たら、あたしは大人しく別れる

「あたしはあんた以外の人のことを好きになるはずが無から安心して」

———彼にはあたしという幸せと感じてほしい

だから、六課の女性みんなの中からあたしを選んでほしい

ここの人達はみんな魅力的だ。

だから、その中からあたしを選んでほしい。

———あたしのことを

「もしこの約束が守れるなら、私の指を舐めて

「あんたに舐めてもらえたら、怪我の治りも早いと思うし」

……舐めてほしいとは思ってたけど、これhやりすぎたかな。

あたしが少し後悔してると、彼はあたしの傷を舐める。

———それを見て、あたしは確信する

「フフフ……」

「舐めてくれるよね

「だって、あんたはあたしのこと大好きだもん

「あたしも大好きだよ

「誰よりも、何よりも

「何時だって、これからも

「——あんたのことを愛してる」

―――あたしは、彼に愛されてることを

―――確信する

あたしは、指をどかして彼に顔を近づける。

―――愛しの彼と2回目のキスをするために

―――

「あたしの血美味しかった？」

あたしが聞くと、彼は困った顔をする。

「……俺は、血の味とかわからないし」

……まあ、そっか

「でも、ティアナのだって考えたら美味しい気がする」

彼は顔を少し赤くする。

―――本当に

「あたしも、あんたのだって思えば何でも美味しいって思えるわよ」

―――血も体も何もかも

「……そっか」

彼は顔を赤くしてあたしから顔を逸らす。

「フフフ……」

「顔が赤いわよ」

「うるさい」

からかうようにあたしが言う。

———本当に、今が幸せだって思える

何時までもこの幸せが続けばいいのに。

———

この物語の終わりをあんたは知ってるかしら？

……邪魔された

あたしの幸せが奪われた。

彼はあの日———

別れ話を切り出したときにいった。

小声で、ギリギリ聞き取れるぐらいの声で。

『ごめん、ティアナ』

———なのはさんは知ってるの？

あたしが諦める条件が『本気で好きな人が出来たら』ってことに。

脅してまで彼をあたしから奪うなら———

あたしが、彼を奪い返す！！

———どんな手を使っても。

———取り戻す

病みつきティアナの裏話（後書き）

幸せだった。

私は彼と付き合うことが出来て幸せだった。

なのに――――

奪われた！！

彼を！！

私の大好きな彼を！！

私が愛してやまない彼を！！

私の恋人を！！

彼女が！！

あの人が奪った！！！！

――許さない

何をしてでも取り戻す！！！！

どんな犠牲があろうと、取り返す！！！！！！

私は――――

彼を愛してるから!!!!!!!!!!!!!!

P S 次回の案内人は私の恋人よ。

私と彼が幸だった頃の話をするらしいわ。

病みつきティアナく病みつきなのは（前書き）

さて、今回の話は語られなかった物語だ。

まあ、正確に言えば語るほどでもない物語だけだね。

これは、俺とティアナが大きく関係している話であり——あ
の人が関わる切っ掛けを作った話でもある。

——さあ、最後のプロローグの始まりだ

病みつきティアナと病みつきなのは

ティアナと付き合い初めて直ぐのこと。

「少しいいかな」

訓練が終わり、『とある場所』に向かおうとした俺をなのはさんが止めた。

「用事があるから、わたしの部屋に来ない？」

やはり、何時もの誘いらしい。

「すいません、先に約束した人がいて」

頭を下げながら言う、なのはさんは慌てて言う。

「君は悪くないよ！」

「悪いのは――」

なのはさんが一呼吸置くと口を開く。

「今日は諦めるよ」

「それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

俺に背を向けて恐らく自分の部屋へと歩きだしたなのはさんを見届けた後、俺も歩きだした。

―――彼女がいるであろう場所に

―――
「遅かったわね」

機動六課にある人気が無い廊下にて彼女―――ティアナに声を掛けられた。

「ごめん、少しなのはさんと話してたんだ」

俺が言うティアナはやれやれといった感じで言う。

「なのはさんもどうしてこう毎日毎日人の彼を誘うんだろ……」

「あんたのこと早く諦めればいいのに」

「……諦めればいいのに」

最後の言葉は独り言のように呟きながら言うとティアナは俺に近づいてくる。

「あんただって迷惑なのにね」

「好きでもない人に毎日部屋に誘われて」

「あんたがなのはさんのことを好きだったら別に――」

「別に、構わないけど」

ティアナは俯きながら続ける。

「ううん、やっぱり駄目だ

「なのはさんだけは

「なのはさんにだけは譲りたくない

「あんたもなのはさんのこと好きじゃないでしょ？」

首を傾げながら聞いてくるティアナに対し俺は応える。

「……好きではないね」

そりゃ、尊敬してるし、自分のことをよく見てくれてるいい教官だとは思ってる。

でも、それだけ。

好きではない。

そんなことを考えていたら、ティアナに腕を掴まれて、そのまま引っ張られる。

「ほら、行くわよ」

……やれやれ

軽くため息を吐きながら――――

嬉しそうに笑っているティアナの横顔を見ながら――――

俺は歩きだした。

――

ティアナは自分の部屋の前に着くと俺の手を離して此方を見る。

――綺麗な瞳で

――俺を見る

「私あんた以外の人を好きにならない」

ティアナは両手で俺の両頬を優しく包み込む。

「私あんた以外の人を好きにならない

「好きになれ無い

「あんただけ――

「私が生涯愛す人はあんただけよ

「――あんたしかないない」

それだけ言うとティアナは俺に顔を近付ける。

俺もそれに合わせて顔を近付ける。

俺とティアナはキスをした。

——恋人同士

——互いに互いを愛してることを確認するために

——キスをした

ティアナが俺から離れると言う。

「あんたは私以外の人を好きになるの？」

ティアナは少し不安そうに言う。

「ならないよ」

——好きだから

「なるはずがない」

——ずっと好きだったから

ティアナは満足そうな笑みを浮かべると部屋に入る。

「おやすみ」

「おやすみ、ティアナ」

俺が言い終わると同時に扉が閉まった。

俺は自室に向かって歩きだした

―――幸せを噛み締めながら

―――

それから3日後、俺は彼女に話し掛けられた。

「――とても大事な話だから」

―――そう

俺は彼女―――なのはさんに話し掛けられた。

―――プロローグは終わった

―――幸せなプロローグが

病みつきティアナ〜病みつきなのは（後書き）

……幸せだったよ

誰に何を言われようが、俺は幸せだった。

勘違いしないでくれよ、今が不幸ってわけじゃないんだ。

ただ、この時が幸せ過ぎただけだ。

ずっと好きだった彼女に愛されて——

彼女を愛することが出来て——

さて、次回は久々の作者登場だ。

需要が無いのは百も承知だけど、せっかくだから病みつきティアナの感想を書きたいんだってさ。

次回は飛ばしてもいいからね。

PS 次の次はいよいよあの人が本格参戦だ。

前書き後書きは俺だけだね。

病みつきティアナ（ティアナ裏話）感想（前書き）

今回は私の病みつきティアナの感想ですので、飛ばしても大丈夫です。

病みつきティアナ（ティアナ裏話）感想

こんにちはー戮bでーす

病みつきティアナとティアナ裏話、そしてティアナとなのはを繋ぐ話し皆さんはどれが一番気に入りましたか？

私はティアナ裏話ですね。

ヤンデレ系の話はそれなりに書いているつもりですが、ヤンデレ目線の話は初めてでしたので大変でした。

さて、これまで投稿した病みつきシリーズの中でもティアナは不評です。

うーん、なんでかな？

ティアナ裏話は殆どティアナと変わらないからしょうがないとして、ティアナが不評だったのは正直ショックでした。

なかなか上手く（私の上手くなんてしれてるけど）出来たと思っただんですけどねー

それでも、感想には後日談が気になると書いてくれた方がいて嬉しかったです！！

ティアナはなのはの前日談と言ってますが、元々そんな予定はありませんでした。

ただ、ティアナの病みつきならなのはにも名前が出てたんだしいけるかなーなんて思いながら考えたのが病みつきティアナです。

病みつきなのはでは既にティアナと付き合っている設定だったので、それを使いました。

それでは、今回はこのあたりにしときましよう。

次回からはあの人が登場!!

P S 途中から感想では無くなってる件について

病みつきなのは(前書き)

さて、この物語もやっと中盤だ。

これから先はバットエンドだ。

少なくとも、俺からしたらね。

……この話は無力な俺の話さ。

無力で優しくて、偽善者な俺の話。

——バットエンドに繋がる話

病みつきなのは

「……どうしたんですか、なのはさん」

その日少年は管理局の仕事が終わり部屋へと戻ろうとした所を高町なのはは止めた

「少し用事があるんだけど……すぐ終わるから私の部屋まで来てくれないかな？」

……またか

高町なのはが仕事終わりの少年を呼び止めるのはコレが初めてではない

3ヶ月ほど前からこの質問はほぼ毎日続けられている

「すいません、今日はもう疲れてて……また今度じゃ駄目ですか？」

少年は苦笑いをしながら彼女の質問に答える

初めの方は呼ばれたら着いていったがやることといえばただの雑談であり

先ほどまで訓練をしていた少年としては今すぐにでも部屋へと戻りそのまま寝たいのだ。

「ごめんね、明日じゃなくて今日話したいことがあるの……とても大事な話だから」

何時もならああいえば諦めてくれるのに……もしかしたら、本当に大事な話なのかもしれない

「わかりました、行きましようなのはさん」

少年がそういうとなのは嬉しそうに笑いながら少年の手を握る

「じゃあ、早く行こ」

「ちょっと待ってください!!」

「?・・・忘れ物でもしたの?」「い・・・いや、そうじゃない、何で手を握るをですか!!?」

「・・・手を握っちゃ駄目なの?」

「いや・・・駄目って訳じゃ無いですけど・・・でも、その・・・恥ずかしいですし・・・」

「私は恥ずかしくないよ?」

どうやら何を言っても無駄らしい

首を傾げながらいうなのはを見ながら少年は手を離してもらうのを諦める

そのまま場の流れにまかせて少年はなのはの部屋まで行く

「それで、大事な話って何ですか?」

なのはの部屋に着き少年は自分が呼ばれた理由を早速聞く

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しは休もうよ」

・・・本当に大事な話があるのか?

なのはは扉の前で立っている少年をソファーに座らせる

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」

「・・・なのはさんと同じでいいです」

「なら、紅茶でいいね」

なのはは少年に飲み物の確認を取るとそのまま小型キッチンに行く
なのはさんやフェイトさんクラスにもなると部屋にキッチンまでつくのか・・・

あれ？そういえばフェイトさんがいない・・・

なのはさんとフェイトさんは同じ部屋のはずだしまだ仕事なのか・・・

「紅茶入れてきたよ」

ソファの前にある小さめ机の上にピンクと青のカップを置き
その青いカップを少年の前に置く

・・・ちょうどいい、聞いてみるか

「そういえばなのはさん、フェイトさんはどうしたんですか？」

「何で？」

「いや、少し気になって・・・」 「何で私の前でフェイトちゃんのことを聞くの？」

「私が毎日のように部屋に誘っても余り来てくれないのに・・・
何でやっと来てくれたと思ったらフェイトちゃんの話をしようにするのかな？」

「い・・・いえ、なのはさんとフェイトさんは同じ部屋だから帰って来ないのかと思ひまして・・・」

「そんなにフェイトちゃんに帰ってきて欲しいの？」

私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ・・・ただ、少しだけ気になっただけ
です、本当に少しだけ」

「・・・それだけ？」

「はい、それだけです」

「そう・・・フェイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、
私が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」

「・・・つまり、今日は始めから俺を部屋に呼んで大事な話をしよ
うとしてたのか」

少年は一端落ち着くため青のカップに手を伸ばし、紅茶を飲む
「・・・少し苦いな、まあ紅茶何て余り飲まないし、こんなものな
のか？」

「美味しい？」

少年がカップを置くと同時になのはが聞いてくる

「美味しいですよ、とても」

「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言って貰
えるように頑張ったんだよ」

紅茶を入れるのに頑張る？・・・まあ、紅茶だって入れ方一つで味
が変わるとか聞くし・・・

なのはが照れ臭そうに自分の頬を掻く

少年はそんなのはを見てると1つの違和感に気付く

「あれ？なのはさん」

「どうしたの？」

「右手の人差し指どうしたんですか？」

先ほど少年の手を握った時は何も無かったのに今は右手の人差し指には包帯が巻かれている

「え!?!?・・・ちよつと訓練の時に怪我しちゃって・・・」

「でも、さっき手を握った時には何も無かったと思ったんですが・・・」

「きつと左手で握ったんだよ!!、だってこれは訓練の時に怪我したんだもん!!!!」 「はあ、そうですか」

まあ、どうでもいいか

少年はなのはの怪我についての質問を止め、ここに来た理由でもある大事な話についてきく

「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか?」

「・・・そうだね、そろそろ話そうか」

「大事な話ってそもそもどういう話何ですか?」

「君の人間関係について少しね」

人間関係?何か問題でもあったか・・・?

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え?、そうでしょうか前と変わらないと思いますけど」

「前からティアナとキスしてたの?」

ッ!?!?・・・何でなのはさんがそれを・・・?

「3日前にね、見ちゃったんだ、ティアナの部屋の前で2人がキス

してたの」

少年が何も言わなくてもなのは続ける

「始めはね、嘘だと思ったんだよ？、でも、次の日も見ちゃったんだ、流石に2日も続けて見ちゃったら信じるしかないでしょう？」

まるで少年の行動が全てわかってると言いたいように少年の言いたいこと全てわかってると言いたいように

「そして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合ってるって言われちゃってね・・・

あれはティアナの勘違いなのかな？、それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな？」

「いや、そんなこと無いですよ・・・」

「何でティアナを庇うの？」

そっか！！、正直に言っちゃったらティアナに何されるか分からないもんね。

でも大丈夫だよ、私が君を守から」

「いや、そうじゃなくて・・・その、告白したのは俺から何です」

少年がそう言うとなのはは首を傾げる

「言ってる意味がわからないよ？だって君はティアナに脅されてるんでしょ？」

そうじゃ無きゃこんな事あるはず無いよ」

「脅されて何ていません！！俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

少年が顔を赤くしながらそう言うとなのははクスクスと笑いだす

「・・・？どうしたんですか」

「ねえ、何で君はティアナが好きなの？」

「それは・・・何時も気が利くし、何があっても前向きだし、優しい・・・」

「そう・・・本当に君が告白したんだ」

なのははクスクスと笑うのを止めると少年の目を真っ直ぐ見る
なのはの目には光が無い

「私は君が望めば何だってするよ、管理局を辞めろって言われれば辞めるし君が自分のために一生働けって言えば一生働いてみせる」

「・・・何が言いたいんですか？」

「ティアナと別れて私と付き合って」

「ッ！？・・・そんなの嫌ですよ！！！」

「何で？君から別れようって言いたくないならティアナに言わせるのもいいよ？」

「いや、そういう話じゃ無くて！！、そもそも別れたく無いんですよ俺は！！！」

「そんなこと無いよ、私はわかってるもん君の本当の気持ちも、君以上に知ってる」

「何でそんなこと言えるんですか？」

「私は君のことずっと見てるんだよ？だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いたいってことも」

・・・無茶苦茶だ

さっきから意味がわからない、もういいや帰ろう

明日また何かあればはやてさんやフェイトさんに相談すればいい

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」

「君は私が出した紅茶を美味しいって言ってくれたよね」

？何だ急に

少年はなのはから差し出された紅茶を飲み確かに美味しいと応えていた

「はい、言いましたけど・・・それが何か？」

「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」

「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」

「うん・・・でも、少し違うかな『しちゃった』んじゃないくて『するようになった』かな」

しちゃったは間違えてやったって感じだがするようにしたって聞くと故意を的を感じだが・・・

「何時もは包帯何てキッチンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかってたから用意しといたの」

「わざと怪我したって言いたいんですか？何でまたそんなことを？」

「君に美味しい紅茶を飲んで貰う為だよ」

美味しい紅茶を飲んで貰う為に怪我をする？

・・・もしかして

「紅茶の中に・・・まさか・・・」 「うん、入れたんだよ、『私の血を』」

ッ！？意味がわからない！！何で自分の血を入れて・・・！！
少年はその話を聞くとそのまま飲んだ紅茶を全部吐き出そうとトイレへと急ぐ

部屋が広くなっただけはいるが基本的な構造は少年と同じということもありトイレは直ぐに見つかりそのままさっき飲んだものを吐き出そうとする

「嬉しかったんだよ、君に美味しいって言ってもらって、紅茶と一緒に私の血の味も褒めてもらってって考えただけで幸せだったよ」
トイレにいる少年に聞こえるように扉に向かって幸せそうに笑いながら言うのは、それを聞いてまた吐き気が少年を襲うがそれに耐える。

ふざけるな！！！！

紅茶と一緒に自分の血を混ぜるだなんて・・・！！
いや、この問題は後だ

今は1分1秒でも早くこの部屋から出たい

少年はさっきから何かいってるのはを無視しながら自分の今連絡できる人たちを探す

ティアナやスバルは寝てるだろうし仮に起きてたとしても力にならないな

エリオとキャロは間違いなく寝てるだろう

・・・なのはさんの事だしここはフェイトさんかはやてさんに助けてもらうか・・・

少年の考えがまとまったと同時に目の前にモニターが出る

そのモニターには右手が映っており、人差し指には包帯が巻かれていた

「ちゃんと私の手見えるかな？」

扉ごしになのはさんの声が聞こえる

やはり、この手はなのはさんのなんだろう

「……何なんですか？」

「君がティアナと別れないんなら私このまま手首を切るよ？」

はぁ！！！？何言ってるんだよこの人！！！？

「な、何でそんなこと！！！？」

「だって君が私と一緒に居てくれないならもう私には生きてる意味が無いもん」「そんなこと無いですよ！！それになのはさんが死んだら六課の皆だって悲しみますよ！！」

少年が説得するなか、なのはは人差し指の包帯を取っていく

「ねえ、見てよこの傷」

包帯が完全に取れた人差し指にはかなり深い傷があった

「本当はもっと小さめの傷にする予定だったんだけど……君とティアナのこと考えたらこんなに深くなっちゃった」

「ッ！！！？……な、何でそんなこと……」

「ちゃんと言ったよ？君が好きだから」

「こんなこと好きな人にやる行動じゃない！！！」

「そうかも知れないね……でも、こうでもしないと君は私を見てくれないでしょ？」「そんなこと……」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには断ってたじゃん」

「そ、それは……」

「ほら、やっぱり君が私を見てくれるにはこうするしか無いじゃん」

そういうとなのはは左手に魔力刃を作る

「どうする？君の答え次第では私は……」

ッ!!!?……本当に死ぬ気なのか!!!?

……俺はティアナの事が好きだ……でも、それでも……

「止めてください!!!ティアナとは別れますから!!!」

「本当？」

「はい、本当です!!ですから自殺何て馬鹿なこと止めてください」

「わかったよ、君が言うなら」

なのはは魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す

少年はトイレから出るとニコニコと嬉しそうな笑顔をしているのはを見る

、今さっき自殺しようとしていた人間には全く見えない

「じゃあ、ティアナとはどうやって別れる？」

「……俺が別れようって言います」

「そっか、わかったよ。」

そろそろ遅いしもうそろそろ帰って寝たほうがいいよ？明日も早いんだし」

「……そうですね、わかりました」

少年はその会話を最後になのはの部屋を出る

「待って!!」

部屋を出ると直ぐになのはさんに呼び止められた

「……………どうしたんですか?」 「これが最後だと思うけど……
・一応ね」

なのはさんは俺に顔を近付けてくる

……………さっきの事もあり、恐怖心からか彼女の目をまともに見れない

「もし私以外の人と君が付き合ったら……………またこういう事になるかも」

「ッ!!!?……………覚えときます……………」 「うん、そうしといて」

それだけ言うとそのまま離れていき「おやすみ」とだけ言ってなのはさんは部屋へと戻っていった。

次の日、俺はティアナに別れ話を出した。

何を言われるかわからなかったが、意外にも何も言われることは無かった。

もしかしたらなのはさんが既に何か言ってたのかもしれない。

最近はなのはさんに誘われたらその誘いに乗ることになっている。

本当は断りたいがこの間の事もあり断るだけの勇気が無いのだ。
だが、この間のような事は無く、なのはさんと2人、フェイトさん
がいれば3人で雑談している。

なのはさんとは付き合ってはいない。

お互いに告白もしてないし俺は告白なんかしたくない
だが、彼女から告白されたら俺はおとなしくそれを了承するのだろ
う。

俺には選択肢なんて無いんだから・・・

今日も訓練が終わり彼女が近付いてくる。
彼女の言うことはわかってるし、それにたいする俺の返答もわかっ
ている。

彼女がいるかぎり俺には選択肢なんて無いんだから・・・

病みつきなのは（後書き）

さて、今回の話はとうだったかな。

本来ならこの物語の1話はこれなんだ。

まあ、今までのプロローグだよ。

……プロローグか。

まあ、体験した俺からすればプロローグだなんて甘いものではないんだけどね。

……にしても、俺はよく血を飲むな。

別の物語に出ている隊長補佐君もよく血を飲むのかな？

また会ったら尋ねてみよう。

PS 次回の案内人はあの人だよ。

あと、感想とかくれたら嬉しいな。

病みつきなのは裏話（前書き）

わたしは見てしまった。

彼の様子を見るためにした行動。

軽はずみな行動だった――――

今でもそう思っている。

でも……正解だった。

そのおかげでわたしは彼を助けることができた。

わたしはずっと彼の傍にいられるようになった。

――――これはそんな話し。

わたしと彼の幸せな物語のプロローグ。

病みつきなのは裏話

彼が風邪で倒れた。

わたしがそれを聞いたのは朝の訓練の時にティアナからだった。

……今日の朝は彼に会えないんだ

流石に風邪で倒れている彼に訓練をさせるわけにはいかない。

私は彼を抜いたFW陣で朝の訓練を開始した。

———なんでティアナは彼が風邪で倒れていることを知ってるんだろう

そんな疑問を胸に抱きながら。

朝の訓練が終わってFW陣が解散する前にわたしはティアナを呼んだ。

「どうしたんですか、なのはさん」

顔には出てないが明らかに嫌そうにティアナは言う。

「彼が風邪で倒れたのを何でティアナが知ってたのか気になってね」

普通なら隊長であるわたしに言うのが先のはずなのに……

何でわたしじゃなくてティアナに連絡したんだろう。

「私が彼に用があって部屋に訪ねたんです

「その時の彼が見てわかるぐらい体調が悪そうだったんで調べたら熱がありました」

……そっか。

そうだよね、彼がティアナに直接教えるはずが無いよね。

だって、わたしは隊長だもん。

教えるなら先ずはわたしからだよ。

「……なのはさん」

ティアナは首を傾げながら言う。

「何でなのはさんが彼を気にするんですか？」

そんなの————

「同じ部隊の仲間だからだよ」

あたりまえだ。

彼はわたし達と同じ部隊の仲間なんだから。

そんな彼を心配するのは当然だ。

「……そうですか」

ティアナは冷たく言う。

「今から私は彼の看病に行くんで失礼します

「なのはさんは来なくても大丈夫ですよ

「彼を看病するのは私だけで充分ですから」

ティアナはそれだけ言うと言きだした。

「でも——」

ティアナはわたしが言い終わる前に被せて言う。

「必要ありません

「彼にはあたし以外——」

……心配だよ

でも、ティアナが看病するなら大丈夫——かな？

仕事が終わったらティアナと一緒に看病に行こう！！

わたしはそんなことを考えながら歩きだした。

――

仕事が終わり、ティアナと共に彼の看病をするため彼の部屋に向かった。

そんな時、偶然にもティアナを見つけたため声を掛けた。

「ティアナ」

ティアナがわたしの方を向く。

ティアナは小さめの鍋を持っていた。

彼に何か作ったのかな？

――料理だったらわたしの方が上手いの

彼にわたしの手料理食べてほしかったな

ちょっと残念だ。

「どうしたんですか、なのはさん」

ティアナは何時もより早口で言う。

「彼は大丈夫？」

ティアナだって疲れてるんだから、早く休んでほしいし――

やっぱり、彼の看病はわたしがしたほうがいいよね。

……彼だってそのほうが喜んでくれるだろうし。

「大丈夫ですよ

「あたしが彼を看病してるんで」

――それでも

「でも、やっぱり心配だよ

「わたし彼の様子見てくるね」

「待ってください!!」

部屋に向かおうとしたわたしをティアナが止めた。

「なのはさんに風邪が移ったら大変ですし、行かないほうがいいですよ

「彼のことはあたしに任せてなのはさんは自室に戻ったらどうですか？」

「でも……」

今日1日彼に会ってないし――

それに、彼の看病もしてあげたい。

「ティアナは今から彼の看病に行くんでしょ？」

「彼も看病してもらう人が1人より2人の方がいいと思うんだ
「だから、わたしもティアナと一緒に――」

「いませんよ

「彼だって、なのはさんが居てほしくないと思いますよ」

わたしはそれを聞いて視線を床に移す。

そんなこと……

でも、もしそうだったら……

「……そうかな」

――それでも

「でも!!」

視線をティアナに移してわたしは言う。

「ティアナだって訓練終わりで疲れてるでしょ？」

「だから、わたしもティアナの手伝いしちゃ駄目かな？」

「わたしもかれのために何かしたいの!!」

風邪で寝込んでいる彼のためになりたい。

訓練終わりで疲れてるティアナのためになりたい。

でも、そんなわたしにティアナは叩きつけるように叫ぶ。

「いりませんよ!!」

「彼の傍にはあたしが居ますから、大丈夫です!!」

っ!!

わたしはそれを聞いて俯く。

「それでは、失礼します」

黙っているわたしを置いていくようにティアナは歩きだす。

……こんなことしちゃ駄目だと思うけど

わたしはティアナにある魔法を使う。

ティアナがそれに気付かず歩いているのを確認したら、わたしも自室に向かった。

「――好きだ」

彼の声が聞こえる。

ティアナに使った魔法はいわゆる盗聴魔法だ。

ティアナが聞こえた音を聞こえるようにしたんだけど――――

わからない。

意味がわからない。

何で彼がティアナに告白してるの？

何で彼が？

そんなのまるで彼がティアナのことを――――

―――ない

――り――な――

ありえない

ありえない！！

何で！何で彼が！！？

ティアナに――――

ティアナに告白してるの！！？

何で――――

「お粥の材料切つてるときに怪我しちゃったの

「少し深く切っちゃってね」

1人困惑しているわたしを置いてティアナは進める。

「六課解散までお互いに本気で好きな人ができたら別れる」

——えっ？

別れる？

彼とティアナが？

……別れる

わたしは彼がティアナの傷口を舐める音を聞きながら、ゆっくりと目を閉じた。

——今後、どうすればいいかを考えるために

——何でわたしはこんなにも嫌悪感を感じてるのかを考えるために

何でわたしは——

——

「少しいかな」

彼とティアナが付き合いだしてから直ぐのこと、わたしは彼を自室に誘った。

——自分の気持ちを理解したいから

わたしは彼のことを好きなのかもしれない。

……わからない。

わたしは異性を好きになったことが無いから、この気持ちが何なのか分からない。

——だから、この気持ちを理解するために

「すいません、先に約束した人がいて」

頭を下げながら彼は言う。

下げる必要なんかないのに。

「君は悪くないよ!!」

「悪いのは——」

——悪いのは彼じゃない

「今日は諦めるよ」

「それじゃ、おやすみなさい」

———悪いのは全部ティアナだもん

わたしは彼に背を向けて歩きだす。

彼も今から約束してた人に会いに行くんだろう。

少ししたあと、わたしは彼の後を付けることにした。

———

彼が約束してた人はやっぱりティアナだった。

彼とティアナは2人仲良く笑みを浮かべながら何か話している。

……彼が嬉しそうに笑っているのを見ると胸が締め付けられるように痛くなる。

それと同時にティアナが憎くなってくる。

……ティアナがいなければ今ごろ2人で話していたのかもしれない。

そう考えるだけでティアナが憎くなる。

———そして

ティアナの部屋の前に付くと、2人は――

――キスをした

わたし以外の人とキスをしている彼を見る。

――嫌だ

こんなの嫌だ!!

自分でもりよくわからない、でも嫌だ。

わたしは――

――

その日、どうやって部屋に帰ってきたかもわからないわたしは、彼のことを思い出す。

初めて会ったときから、今日のティアナとキスしてるところまで、全て昨日の事のように思い出せる。

――それぐらい

――それぐらいわたしは彼のことが好き

……好きなんだ。

ユーノ君やクロノ君とは違う、全然違う。

比べものにならないぐらい彼のことが好き。

———だから

ティアナから、彼を取り戻す。

きっと彼が言った告白もティアナに無理矢理言わされたんだ。

そうに違うない。

———それ以外ありえない

ありえない。

———

あれから2日後。

彼とティアナは毎日訓練後に会ってはキスをしていた。

「ねえ、ティアナ」

その日の昼に私はティアナを呼び出した。

「どうしたんですか、なのはさん」

ティアナは一瞬嫌そうな顔をする。

「今日ね、ティアナに見せたいものがあるんだ」

今日のための準備は万端だ。

「見せたいもの……ですか？」

ティアナは首を傾げながら言う。

「うん、訓練が終わったらまた呼ぶね」

私はそれだけ言うとティアナと別れて自分の部屋に向かった。

……先ずは

部屋に着いてすぐ私は救急箱を台所に移した。

——彼はティアナの血を飲んだ。

彼はティアナの血を飲んで汚れてしまったんだ。

———だから

私の血を彼に飲ませて綺麗にしないと。

本当なら彼の汚れた箇所を切り抜きたいけど———

そんなことをしたら彼は死んじゃうから駄目だ。

……ティアナのせいで汚れてしまった彼を少しでも綺麗にしてあげよう。

———私は

———私だけが

彼を本当に愛してるんだ。

だから、彼を綺麗にいてあげる。

愛しの彼を。

———

訓練が終わるより少し前にティアナを空き部屋に呼び出した。

「見せたいものって何なんですか？」

私はティアナをバインドで拘束する。

「ッ！ なのはさん!？」

驚いているティアナの前にモニターを出す。

「これは……」

「私の部屋だよ

「ティアナに見せたいものはもう少しだけ時間が掛かるの
「だから、もう少しだけここで待っててね」

私は何か叫んでいるティアナを置いて部屋から出ていった。

「……どうしたんですか、なのはさん」

ティアナと別れてすぐに彼に話しかけた。

「少し用事があるんだけど……すぐ終わるから私の部屋まで来てく
れないかな？」

今日は何があっても彼を連れていかないと――――

「すみません、今日はもう疲れてて……また今度じゃ駄目ですか？」

……そんなにもティアナに早く会いたいの？

私よりもティアナの傍にいたいのか！？

「ごめんね、明日じゃなくて今日話したいことがあるの……とても大事な話だから」

私が念を押すと彼はあきらめたように言う。

「わかりました、行きましようなのはさん」

……彼はやっぱり私の言うことを聞いてくれる。

私も君の言うことなら何でも聞くよ。

「じゃあ、早く行こ」

私は彼の手を取る。

「ちょっと待ってください!!」

「?……忘れ物でもしたのか？」

「い……いや、そうじゃなくて、何で手を握るのですか!!?」

「……手を握っちゃ駄目なの？」

「いや…駄目って訳じゃ無いですけど……でも、その……恥ずかしいですし」

「私は恥ずかしくないよ？」

彼は顔を赤くしながら言う。

可愛いな。

どんな彼でも好きだけど、恥ずかしそうに顔を赤くする彼はまた一段と好きになりそう。

そんな彼の横顔を見つめながら私たちは私の自室へと向かった。

――――

「それで、大事な話って何ですか？」

部屋について彼は私に言う。

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しは休もうよ」

……そうしないと彼を綺麗にできない。

私は部屋の前に立っている彼をソファ―に座らせた。

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」

私は彼に聞く。

「……なのはさんと同じでいいです」

「なら、紅茶でいいね」

私は彼を置いて台所にむかった。

私は台所に行くと紅茶の用意をする。

2人分のカップを置くと、1つの上に右手の人差し指を置く。

左手に包丁を持つと、右手の人差し指を軽く切る。

……ティアナの血で汚れた彼を綺麗にするために。

「っ！！」

私はふと彼とティアナがキスをしたことを思い出した。

「あ……」

私の予想よりも深く切ってしまった。

彼のカップに私の血が溜まっていく。

……これだけあれば綺麗になるかな？

私はそんなことを思いながら傷跡に包帯を巻いた。

——もう少しだよ

——もう少しで

君を綺麗にできるよ。

——綺麗にしてあげれるよ。

——

「紅茶入れてきたよ」

彼の前に私の血が入った紅茶をおいた。

「そういえばなのはさん、フェイトさんはどうしたんですか？」

ッ！！

何で——

「何で？」

「いや、少し気になって……」

意味がわからない。

「何で私の前でフェイトちゃんのことを聞くの？」

「私が毎日のように部屋に誘っても余り来てくれないのに……何でやっと来てくれたと思ったらフェイトちゃんの話をしようとするのかな？」

そんなに私と二人でいるのはいやなの？

なんで？

私はこんなにも君の傍にいたために、君を邪魔な人達から守るためにがんばってるのに！！

「い……いえ、なのはさんとフェイトさんは同じ部屋だから帰って来ないのかと思ひまして――」

「そんなにフェイトちゃんに帰ってきて欲しいの？」

「私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ……ただ、少しだけ気になっただけですが、本当に少しだけ」

「……それだけ？」

「はい、それだけです」

「そう……フェイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、私
が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」

はじめから君を部屋に呼ぶつもりだったんだもん。

フェイトちゃんには前もってお願いしといた。

彼は一息つくと紅茶を口にする。

飲んでくれた。

彼が私の血が入った紅茶を飲んだ。

飲んでくれた！！

「美味しい？」

彼がカップをテーブルに置いたのを確認するという。

「美味しいですよ、とても」

っ！！

彼が私の血が入った紅茶を美味しいって言ってくれた！！

「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言って貰
えるように頑張ったんだよ」

これで少しは綺麗になったかな。

えへへへ

君の役に立ったって考えただけで嬉しいな。
幸せな気分になるよ。

……やっぱり、君を幸せにできるのは私だけ。

私だけなんだ!!

「あれ？なのはさん」

「どうしたの？」

「右手の人差し指どうしたんですか？」

えっ!？

「え!？……ちょっと訓練の時に怪我しちゃって――」

「でも、さっき手を握った時には何も無かったと思ったんですが…
…」

「きつと左手で握ったんだよ!!、だってこれは訓練の時に怪我したんだもん!!!」

「はぁ、そうですか」

やっぱり君はわたしのことを見てくれる。

私も君のことちゃんと見てるよ。

「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか？」

「……そうだね、そろそろ話そうか」

「大事な話ってそもそもどういう話何ですか？」

「君の人間関係について少しね」

ここからが本題だよ。

君に関すること。

これを見てるティアナに関すること。

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え？、そうでしょうか前と変わらないと思いますけど」

「前からティアナとキスしてたの？」

違うよね。

君がティアナとキスするぐらい仲がよくなったのは、きみが風邪で倒れてからだよね。

……あれから君が汚れちゃったんだよね。

「3日前にね、見ちゃったんだ、ティアナの部屋の前で2人がキスしてたの」

君のことをストーキングしたときにみた。

君の事を見てるとき見てしまった。

「始めはね、嘘だと思ったんだよ？、でも、次の日も見ちゃったんだ、流石に2日も続けて見ちゃったら信じるしかないでしょう？」

……嘘じゃない。

君がティアナのモノになった。

「そして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合ってるって言われちゃってね……

「あれはティアナの勘違いなのかな？」

「それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな？」

多少強引でも君を取り戻さないと。

私の君を————

「いや、そんなこと無いですよ……」

「何でティアナを庇うの？」

そっか！、正直に言っちゃったらティアナに何されるか分からないもんね。

でも大丈夫だよ、私が君を守から」

私は何時でも、何処でも君の味方だよ。

君だけの味方なんだもん。

だから、ティアナのことを庇わなくてもいいんだよ。

「いや、そうじゃなくて……その、告白したのは俺から何です」

……違う。

「言ってる意味がわからないよ？だって君はティアナに脅されてるんでしょ？」

そうじゃ無きゃこんな事あるはず無いよ」

君はティアナにそう言うように脅されてたんだよね。

「脅されて何ていません!! 俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

彼は顔を赤くしながら言う。

私はそんな可愛い彼をクスクスと笑いながら見つめる。

「……? どうしたんですか」

「ねえ、何で君はティアナが好きなの?」

「それは……何時も気が利くし、何があっても前向きだし、優しいし——」

「そう……本当に君が告白したんだ」

やっぱり汚れちゃってる。

彼がティアナのせいで汚れちゃったよ。

大丈夫だよ——

私が綺麗にしてあげるからね。

「私は君が望めば何だってするよ、管理局を辞めろって言われれば辞めるし君が自分のために一生働けって言えば一生働いてみせる」

「……何が言いたいんですか?」

「ティアナと別れて私と付き合って」

「ッ!? ……そんなの嫌ですよ!!」

「何で? 君から別れようって言いたくないならティアナに言わせるのでもいいよ?」

「いや、そういう話じゃ無くて!、そもそも別れたく無いんですよ俺は!!」

ふーん

そんなにもティアナに毒されちゃったんだ。

「そんなこと無いよ、私はわかってるもん君の本当の気持ちも、君以上に知ってる」

「何でそんなこと言えるんですか？」

「私は君のことずっと見てるんだよ」

「だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いたいってことも」

そのほうが君のためだ。

私は他のみんなと違って自分の利益なんてかんがえない。
君の事しか考えない。

そんな私といったほうが君も幸せだよ。

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」

「君は私が出した紅茶を美味しいって言うてくれたよね」

立ち上がろうとした彼を私は止める。

「はい、言いましたけど・・・それが何か？」

「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」

「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」

「うん……でも、少し違うかな『しちゃった』んじゃないって『するようにした』かな」

彼は首を傾げる。

彼はどんな顔をするのかな？

「何時もは包帯何てキッチンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかってたから用意しといたの」

「わざと怪我したって言いたいんですか？何でまたそんなことを？」

どんな顔でもいいよ。

私はどんな君でも愛してるもん。

「君に美味しい紅茶を飲んで貰う為だよ」

「紅茶の中に……まさか——」

彼はまさか言いたげな顔をする。

「うん、入れたんだよ、『私の血を』」

それを聞くと彼は口を押さえて走りだす。

方向からしてトイレかな？

「ねえ、ティアナ見てる？」

私は上を見て言う。

「……彼は返してもらおうよ」

私は歩き出した。

彼のことを考えながら。

彼が私の思いに伝えてくれないなら――

「……何なんですか？」

「君がティアナと別れないんなら私このまま手首を切るよ？」

――こんな世界で生きる意味なんかない。

「な、何でそんなこと!!?」

「だって君が私と一緒に居てくれないならもう私には生きてる意味が無いもん」

「そんなこと無いですよ!! それになのはさんが死んだら六課の皆だって悲しみますよ!!」

知らないよ。

君が傍にいてくれない世界なんか興味ない。

誰に悲しまれようとか関係ない。

「ねえ、見てよこの傷」

私は彼に見えるように包帯を取る。

「本当はもっと小さめの傷にする予定だったんだけど……君とティアナのこと考えたらこんなに深くなっちゃった」

「ッ!? ……な、何でそんなこと――」

「ちゃんと言ったよ? 君が好きだから」

「こんなこと好きな人にやる行動じゃない!!!」

「そうかも知れないね……でも、こうでもしないと君は私を見てくれないでしょ？」

「そんなこと……」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには断ってたじゃん」

「そ、それは――」

「ほら、やっぱり君が私を見てくれるにはこうするしか無いじゃん」

私は今が幸せだよ。

君が私を――

私のことだけを見てくれている今が――

私は左手で魔力刃をつくる・

「どうする？ 君の答え次第では私は……」

死んでもいい。

君が死ねというのなら

死んでもいい。

「止めてください！！！！ティアナとは別れますから！！」

彼は叩きつけるように叫ぶ。

「本当？」

「はい、本当です！！ですから自殺何て馬鹿なこと止めてください」

「わかったよ、君が言うなら」

君が死なないでと言うなら死なない。

私は君の言うことなら何でも聞くから。

私は魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す。

彼はトイレから出てくる。

ああ、やっと彼を取り戻せた。

これからは私が君の事を守るからね。

もう誰も君を汚させない。

君を手放さない。

———永遠に

「じゃあ、ティアナとはどうやって別れる？」

「……俺が別れようって言います」

「そっか、わかったよ」

「そろそろ遅いしもうそろそろ帰って寝たほうがいいよ？明日も早
いんだし」

「……そうですね、わかりました」

俯いている彼は部屋からでるために歩き出した。

「待って!!」

部屋をでて直ぐに私は彼を呼び止める。

「……どうしたんですか？」

「これが最後だと思うけど……一応ね」

私は彼に顔を近づける。

彼は私と目を合わせてくれない。

でも、いいよ。

今はまだ――――

時間はまだまだあるもんね。

「もし私以外の人と君が付き合ったら……またこういう事になるかも」

「ッ！！？……覚えときます」

「うん、そうしといて」

驚いた顔をする彼から離れる。

「おやすみ」

そのまま私は部屋に戻った。

――――

この話のその後の話をしようかな。

彼はティアナと別れてくれた。

―――彼は、私の言うことを聞いてくれる

嬉しいな。

幸せだな。

君の傍にるのは私
私の傍にるのは君

——いつまでも

——永遠に

——幸せだよ

病みつきなのは、裏話、（後書き）

幸せだよ。

君といられて幸せだよ。

君も幸せでしょ？

幸せだよね。

幸せって言ってよ。

———
ねえ

PS 次回はオリジナルの話になるよ。

病みつきなのは、閑話談（前書き）

今回は、最後のチャンスを捨てた話だ。

何のチャンスかって？

それは本編でのお楽しみさ。

前書きで書くことではない。

それじゃ、そろそろ始めよう。

——俺が愚か者に成り下がる、閑話の始まりだ

病みつきなのは〜閑話談〜

今日という日は俺が忘れることは無い日になるんだろう。

機動六課解散当日

終わりは決まっていたとはいえ淋しいものだ。

———今日から俺は彼女に会えなくなるかもしれない

———今日から俺は彼女に会わない人生を送りたい

今日という1日は本当に忘れられない日になりそうだ。

———

「おはよう、今日はいいい天気だよ」

自室を出てすぐになのはさんに声を掛けられた。

あの日以来毎日のように彼女は朝早くから俺の部屋の前にいる。

「おはようございます。今日がいい天気でよかったですね」

「そうだね。」

皆とお別れする日なのに天気が悪いのはいやだもん」

なのはさんが近づいてくると俺の手を取る。

「最後に2人で六課を見て回ろうか」

……断れないよな

「わかりました。行きましょう」

俺は二つ返事で了承すると歩きだした。

――――

六課のメンバーが全員集まることはもうほとんど無くなるんだろう。

こうして廊下を歩き、すれ違う皆の顔を見るのも最後なのかもしれない。

そう思うと、なかなか悲しいものだ。

「大丈夫、君にはわたしが傍にいるよ」

なのはさんは俺の心と呼んだかのようなタイミングで口を開く。

「六課の皆とは会えなくなるかもしれないけど、わたしなら何時でも君に会えるよ。」

わたしは何時でも君の傍にいるし、離れてても君のことを見てるからね。

君はそれだけで充分でしょ？

わたしだけで充分だよね。

充分に決まってるよね。

君の傍にはわたし以外いらなし、わたしの傍にも君以外いらなし。

だから、六課の皆と会えなくなっても悲しまなくてもいいんだよ。君の傍にいるべきわたしは何時でも傍にいるんだから。

わたし以外の人間が離れていっても気にしなくてもいいんだよ。

悲しむ必要なんて無いよ。

そう思うよね？

そうとしか思わないよね」

なのはさんは足を止めると俺を真っ直ぐ見る。

「君に必要なのはわたしだけ。

わたしもそう

わたしに必要なのは君だけ

それ以外は関係ない。

わたしと君

必要なのはそれだけだよ。

それ以外は邪魔なだけだよね。

特にティアナ

ティアナはわたしと君の関係を今だによく思っていないみたいだし

……

ティアナには全く関係ない話なのにね」

「……そうですね」

ティアナの名前が出てきて俺は彼女のことを思い出す———思
い出してしまふ。

「そんなことより、早く行きましよう」

「待って」

俺が気まずい空気を少しでも変えようと試してみるが、なのはさ
んはそれを止めると顔を近づけてくる。

「六課が解散しても、わたしは君を何時でも見てるよ。

どんなに離ればなれになっても君のことを見続ける。

どんな些細なことでも君のことを理解してるよ。

———だから」

なのはさんは人目を気にせず俺にキスをする。

動かない、抵抗しようとしないうちに一方的にキスをした。

数秒後、彼女は俺から離れる。

「だから、君もわたしのことを知ってね。

どんな些細なことでもいい。

わたしのことを少しでも理解してほしいの。

わたしのことを少しでも見ていてほしいの。

———君には

———君だけには

わたしのことを誰よりも傍で見たいほしい。

何時でも、どんな時でも傍にいてほしい。

———わたしの傍に」

愛しい者を見るような目でなのはさんは俺を見て、静かに言った。

———俺が彼女から離れたらどうなってしまっただろうか

心配だ

誰が？

彼女が？

自分が？

周りの人が？

———どれもだ

なのはさんは何をしでかすかわからない。

だから、傍にいる

———居たくないけど、傍にいる

せめて、六課が解散するまでは。

今日までは。

今日という日を終われば、会わないように気おつけられればいいだけ

の話だ。

——だから

それまでは、あなたの傍にいますよ。

なのはさん

——

機動六課解散

それは、俺が自身の考えが甘いことをしらなかった時であり

それは、バッドエンドへの片道切符を破棄するチャンスを失った

——忘れられない1日だった

病みつきなのは、閑話談（後書き）

バッドエンドの片道切符

それが意味することはいずれわかるさ。

……今回は、彼女の独壇場だったね。

俺は馬鹿みたいなことを考えることしかなかった。

彼女から逃げるならともかく、彼女の傍にいたなんて決断は俺が愚か者だということがよくわかる決断だったじゃないか。

本当に憐れだよ、俺は

PS次は誰が得するか分からない作者の感想だよ。

もしかしたら飛ばすかもしれないけど

病みつきなのは（なのは裏話）感想（前書き）

今回は作者の感想だよ。

飛ばしてOkな話さ。

むしろ飛ばさないのかい？

病みつきなのは（なのは裏話）感想

こんにちはー戮bでーす

病みつきなのはとなのは裏話、そしてなのは閑話談。

皆さんはどれが一番気に入ったかな？

私は閑話ですね。

バッドエンドへの片道切符を手にした主人公はどうなるのか――

エンディングは何個あるのでどれにするか悩んだりします。

さて、病みつきなのは私が初めて書いてみた短編です。

今と書き方が余り変わってない気が……

少しは成長したいです。

病みつきなのはが今のところ短編では最もヤンデレらしく出来て
るんではないんでしょうか。

他の短編はそこまですしね。

感想にも書かれましたがなのは一般的なヤンデレっぽく書いて
ます。

というか、なのははとあるキャラをイメージして書いてます。

なのはを書くのに他のキャラをイメージする。

意味がわからんWWW

さて、次回からは後日談に入ります。

いよいよ物語もクライマックス……!!

……先ずはティアナ後日談を書かないとな。

病みつきなのは（なのは裏話）感想（後書き）

次回からは後日談みたいだね。

……物語もクライマックスか

バッドエンド確定な俺からしたら、複雑な気持ちだよ。

PS 次回更新は近いうちにやるらしいから楽しみにしといてね

病みつきなのは〜後日談〜（前書き）

さあ、物語も残すところあと僅かだ。

ここから先はバッドエンドまっしぐらだよ。

——俺がもし、彼女に向き合っていたら

逃げずに向き合っていたら

——物語は変わったんだろうね

まあ、既に切符を手に使っていたこのころの俺が後悔しても遅いんだよね

病みつきなのは〜後日談〜

機動六課が解散した

もともと1年で解散する予定だったため驚く事じゃない。

あれから、俺となのはさんは会ってない。

向こうは管理局のエースで俺はただの凡人なんだ、簡単にあえるわけが無い。

…会いたくも無いけど

なのはさんはから来たメールは返すようにしている。前みたいな事になるのは嫌だからだ。

「大丈夫？」

声が聞こえた方を見ると、そこには心配そうな顔で俺を見ているフェイトさんと目が合う。

「もうすぐこの事件も終わるから、それまで一緒に頑張ろ」

…そう笑顔で言われたら頑張るしかない

フェイトさんが言っていたが俺は今とある事件を解決させるため大型ビルの中にいる。

3つの班に別れて行動しておりその1つが俺とフェイトさんだ。

：他の班は5人ぐらい入るのに：まあ、フェイトさんがいれば大丈夫だろう。

「そうですね。この事件もこれで終わるでしょうですし、頑張りましょう」

そう笑いながら俺も言う。

フェイトさんはそれを聞き、嬉しそうに笑いながら進んでいく。

しばらく歩いたあと、1つの扉の前に着く

「ティアナ達はもう侵入したらしいし、私達も急ごう」

そういうと、フェイトは扉の中に入っていく。

少年はフェイトに付いていきながらもある事を思い出す。

それは、ティアナと別れる前の事

あの日なのはにされたことそして、それからの少年となのはの事

今でも少年はなのはには逆らえない。

逆らえばなのはがどんな行動をするか少年は理解出来ないからだ。

「ガジェットが来てるみたい」

前の方から人型のガジェットの大群が来ている。

フェイトはそれを確認するとガジェットの大群に突っ込む。

「サポートお願い!!」

フェイトは少年にそれを言うと、ガジェットを次々に破壊していく。フェイトが破壊しきれなかったガジェットや後ろから狙うガジェットにはナイフが刺さり、そのナイフは爆発する。

「わかりました、援護は任せてください!」

そう言う少年の手には青色の魔力で作ったナイフで次々にガジェットを倒していく
そう言う少年の手には青色の魔力で作ったナイフで次々にガジェットを倒していく

――――

少年が指を鳴らすと最後のガジェットに刺さっていたナイフが爆発する。

「これで最後だね」

フェイトは周りを警戒しながら少年に言う。

「そうみたいです。これでティアナ達少しでも楽になればいいんですけど…」

少年とフェイトはこの作戦では陽動とそれに釣られたガジェットの破壊なので後はティアナからの連絡を待つ事しか出来ないのだ。

・・・結構な数がいたな

少年は周りに広がるガジェットの残骸を見ながら先ほどの戦いを思

い出す。

「ティアナから連絡が来たよ。無事に捕まえたって」
フェイトは嬉しそうに笑いながら少年に報告すると直ぐにティアナとの連絡に戻る。

「…じゃあ、そろそろ戻ろっか」

連絡が終わりそのまま来た道に戻るフェイトさんに着いていくように少年も戻っていく。

…はあ、戻ったら報告書か…

――――

管理局に戻ってきた少年とフェイトは管理局内にあるカフェに向かった。

「はい。コーヒーでいいですね」

先に座っていたフェイトの前にコーヒーが入ったカップを渡す。

フェイトは少年に礼を言うのとそれを受け取る。

「事件も終わったし、もう戻るの？」

「いえ、今日はもう来なくていいと先ほど連絡が来たので今日は久々に家に帰るつもりです」

少年が所属している課は他の課の事件に対して必要な人材を派遣す

るのが仕事のため他の課の人達以上にミットにいる事が少ないためなかなか家に帰る機械が無いため久々に家に帰れるため少年は嬉しそうだ。

「といっても、明日迄に報告書を書かないといけないんですけどね」

「そっか、私は休憩が終わるまで時間があるから一緒に話さない？
ティアナ以外の六課の人と合うのは久しぶりなんだ」

「いいですよ、俺も今日は時間がありますし」

フェイトは少年の返事を聞くと嬉しそうに笑いながら六課の話をする。

少年も過去を振り返りながらそれに応える。

「…あ、もう時間だ。じゃあ、今度のパーティーで会おうね」
「待ってください」

フェイトの言葉に対して即返事を返す少年、それに対して不思議そうな顔をするフェイト。

だが、少年の返事の意味がわかったのか悲しそうな顔になる。

「もしかして、来ないの？六課のメンバー殆ど来るんだよ？」

…いや、というか

「パーティーって何ですか？俺は何も聞いてないんですが…？」

「ふえ？こないだ私がちゃんと伝えといたはずだけど…」

フェイトと少年はそれぞれ伝えたか、伝えてないかを思い出す。

…やっぱり聞いた覚えが無い

「わ、忘れてた！！伝えようとしたら事件が進展してタイミングを逃してたんだった！！」

少年は呆れたように目の前であわてているフェイトを見ながら推測する。

…パーティーには六課のメンバーが殆ど来るらしいという事はなのはさんが来てもおかしくはない

少年がフェイトに対して質問をしようとする前にフェイトが口を開く。

「あ、なのは！」…え？

少年は恐る恐る振り向くとそこにはニコニコと嬉しそうな笑顔の高町なのはがいた。

「2人とも久しぶりだね」

なのははそのままフェイトの隣に座る。

…何でこんなところに…？いや、此処は管理局だし居てもおかしくない。
油断してた。

何時もなら少し離れたところで、会う確率が低いところするのに。

少年は自分の油断に後悔しているとフェイトが立ち上がる。

「せっくなのはと会えたから話でもしたいけど私そろそろ時間だから行くね」

「そっか。せっかくフェイトちゃんに会えたのに残念だなー」

「今度のパーティーで会えるよ」

じゃあね、とフェイトは少年となのはに手を振りながら自分の仕事場へと向かっていった。

それをなのは手を振り返して見送り、少年はただ俯きながらこれからを考える。

「じ、じゃあ俺も仕事があるんで、これで」

少年は流れにのりこの場を立ち去ろうとするがなのはに手を掴まれる。

「君は今日は休み何でしょ」

「え!?! 何でそれを」

・・・俺だってさっき知った話だしその話をした時はなのはさんは居なかったはずだ。
ならなんで?

「君の隊長さんから話を聞いてきたんだーだから今日は君が休みって事は知ってるし、君が今まで何をやってきたかも知ってるよ」

少年の聞きたい事がわかったのかなのはは先回りして言う。
光りがない濁った目で少年を見つめながら、少年の言いたいことが
全てわかってるかのように。

「何をやってきたかも知ってるって：流石に言い過ぎじゃないですか？」

「そんな事無いよ。何時も隊長さんから話を聞いてるんだから」

「何時も！？何でそんな事：」

「好きだからだよ。君のことが大好きなの。ううん、そんなんじゃない愛してる、君の事を誰よりも」

なのはは頬を紅く染めながら、だがはつきりと言う。それを聞いて
いた周りの人達が騒めきだす。

フェイトとなのはがいた時点でかなりうるさかったが今はその時以上だ。

対する言われた少年は顔を真っ赤にするのでもなく困った表情を浮かべるのでもなく、ただ俯くだけ。

強いて言うなら顔が少し青くなった位だ。

「そろそろ時間だから私も行くね」

ずっと俯いてる少年に何も言わずになのはは立ち上がる。

「それとパーティーのことだけど安心していいよ。隊長さんには前もって言ったから。ちゃんと休みになってるはずだよ」

だからとなのはは続ける。俯いてるだけの少年が当日逃げないように、自分が本当に隊長と話してることを証明するように。

「ちゃんと来てね。…来ないと私……」

「……どうなっちゃうかわからないから」

それだけ言ってなのはは去っていく。

それを聞き少年は顔を上げるとすぐに自分の隊長に連絡をするため場所を離れる。

野次馬が多過ぎてまともに連絡も出来ないからだ。

連絡した結果、パーティー当日は休みらしい。

理由は単純に管理局のエースに頼まれたからと応えられた。

いや、少年からすればそんなものでもいい。

ただ、最後のなのはの言葉これが問題なのだ。

行かなければどうなるかなんて考えたくないし、考えられない。

なのはがどんな行動をするかわからないからだ。

もしかしたら自殺かもしれない。

もしかしたら俺を殺すかもしれない。

もしかしたら俺を監禁するかもしれない。

そんなありえなさそうなことを考えてはただ震えるだけ……それだけの毎日を通してパーティーの日になった。

……

パーティー会場の近くにある公園にのベンチに少年は座っている。隊長が管理局のエースからと言われ、渡された1枚の招待状を手にしながらそれを見つめる。

場所はここからなら歩いて3分もかからない場所であり時間はまだ1時間も余裕がある。

・・・コレなら流石に遅刻はしないだろう

少年は右にある建物を見る周りのビル群よりも高く、目立つ建物。

この建物はホテルであり、その最上階にあるで今日のパーティーは行われる。

…こんな格好でいいかな？

今の少年はスーツを着ている。

初めは管理局の制服か私服か迷ったが招待状にはしっかりとした服装で来ることと書かれていたためこうなった。

1人で大きめなため息をしながら、空を見上げると綺麗な星空が見える。

…まあ、どうでもいいけど

「空に何かあるのか？」

少年が現実逃避に近いことをしていると声をかけられた。

初めは他の誰かかと思ったがこの公園には少年しかいないためその可能性はない。

少年が声のした方を向くとシグナムとエリオとキャロがいた。

「こんばんはシグナムさん、エリオ、キャロ」

「「こんばんは」」

少年の挨拶にエリオとキャラは仲良く声を揃えて応える。

「会場に向かわなくてもいいのか？」

「まあ、時間もありますしね。シグナムさんはどうして2人というんですか？」

「我が主に頼まれたのでな」

シグナムの質問に少年が応えると今度はキャラが少年に話しかける。

「久しぶりですね。元気でしたか？」

「まあ、元気かな。キャラは…元気そうで何よりだよ」

嬉しそうに笑いながら聞くキャラき少年は応える。

…やっぱり子供は苦手だ

そんな少年の思いを余所にエリオが少年に話しかける。

「何時もの管理局の制服もいいですけどスーツ姿も格好いいですね」

「エリオも似合ってるよ」

服装に自信が無かった少年からすれば社交辞令とはいえ安心するものがある。

「そういえば、何でフェイトさんじゃなくてシグナムさんが迎えに行っただんですか？」

「む…私では何か不満でも有るのか？」

「いえ、ただ気になっただけです」

「…テストロッサは少し遅れてくるらしいからな。その代わりに私が迎えに行ったのだ」

…相変わらず仕事熱心な人だ

「お疲れさまです」

「ふっ、これぐらいたやすいさ」

…迎えに行くだけで大変な人なんているのか？

「では、そろそろ行くでしょう」

「では、また後で」

少年が手を振りながら言うのと3人はキョトンとする。

「何言ってるんですか？一緒に行きましょうよ」

キャラが少年に近付きながら言う。

「そうですよ。皆で行きましょうよ」

エリオが少年に近付きながら言う。

「む・・・そういえばお前とは余り模擬戦をしてなかったな」

「さあ、目的地も近いし早く行こうか」

シグナムが何か言いだす前にパーティー会場に逃げるため近づいてきた2人の手を握りながらパーティー会場に向かうことにした少年。

…今日は凄く疲れそうだ

—————

パーティー会場内では既に沢山の人で賑わっていた。

「まだ始まってないのに沢山来てますね」

「それだけ皆楽しみだったって事だろうな」

エリオが回りの人を見ながら呟いた言葉に少年は返事をする。

「…にしても多過ぎないか？半分近くの人がきてる気がする」

「それだけ皆楽しみだったんですよ」

少年の呟きにキャロが応える

…まあそうなのかも知れないな。

でも、これだけ人がいると探すのに時間が掛かるな。

「どうかしたんですか？」

「いや、大丈夫だよ」

「でも、さっきから周りを見渡してばかりじゃないですか」

「懐かしい人ばかりだなんて思ってたね」

「そうですね、解散したあとそれっきりって人達も多いですしね」

…まあ、本当は会いたくない人達を探してるんだけど。

少年が会いたくない人達というのはのはとティアナの2人である。最悪でも2人同時に見つかるなんてことは無いようにしないと思い少年は周りを見渡している。

…今のところは2人ともいないのか？
それとも俺が見つけてないだけなのか…

「あつ、フェイトさんだ!!」

キャラが指差した方向には、2人を探してるのか周りを見渡しているフェイトさんがいた。

少年がそれを見ると2人と結んでいた手を離す。

2人は少年に礼を言うとそのままフェイトさんの方へと走って行った。

…さて、これからどうするか。

まあ、そろそろ始まる時間だしそこら辺に居ればいいか。

少年は近くの壁にもたれながら入り口を見つめる。
まだまだ人は来るらしい。

「えー、この度は六課の皆様集まってくれて本当にありがとう」

「まあ、堅っ苦しいのは無しにして皆で盛り上がりましょう!!」

六課の部隊長ということもあり、始まりの挨拶ははやてさんが行っ

た。

…といっても皆挨拶無しでも盛り上がっていたため余り意味は無かったと思う。

パーティー会場の入り口は既に人の出入りが無くなりかけておりそれはもう殆んどの人が来たことを示している。

少年は既になのはとティアナの場所を把握しているため後は会わないように場所を調整すればいいだけだ。

「あつ、見つけた。探したんだよ」

少年に声を掛けてきたのはフェイトだった。

「探した？何か用事でも」

「うーん、用事と言うより私が君と話したいから探したの…迷惑だったかな？」

「そんな事無いですよ」

少年の顔を伺うように上目遣いで言うフェイトにたいし少年はフェイトを安心させるためにも笑顔で言う。

「キャラとエリオの相手をしてくれてありがとう」

「礼を言われるような事じゃ無いですよ」「2人は何処に行ったんですか？」

「エリオとキャラのこと？その2人ならスバルとティアナと話してくるって言ってたよ」

「…そうですか」

「2人とも喜んでたよ。久しぶりにFWのメンバーと合えるんだーって」

「全員揃うことはもうないと思ってたんでしょね。そういえばフエイトさん意外と来るの早かったんですね」

「うん。仕事が速く終わったから急いできたの」

「それはよかったですね」

「ん？…少し待っというて下さい」

少年がフエイトに言うのとテーブルに置いてあったグラスにワインを注ぐ。

「どうぞ」

「ありがとう。でも、君は飲んじゃ駄目だよ、まだ未成年何だから」
フエイトは差し出されたグラスを受け取りながら自分の分を用意している少年に注意する。

「こういう時ぐらい許してくださいよ」

「…もう、今回だけだよ」

フエイトの反応を楽しみながらも少年は2人の居場所を確認する。

ティアナは俺を抜いたFWのメンバーとなのはははやと話してい

るのを確認する。

…ティアナはともかくなのはさんが話し掛けて来ない…？いや、今回のパーティーの日を休みにしてくれたのも善意なのか…？いや、それは無い…と思う

「どうかした？」

「え！？いや、何でも無いですよ」

「本当に大丈夫？こないだのの任務の時も突然ぼーっとしてたし…」

「大丈夫ですよ。少し考え事をしてただけです」

「でも、無理はよくないよ？」

「え…？」

少年の言葉に返事を返したのはフェイトではなかった。だが、声だけで少年はその人が誰だかわかった。

「2人とも何はなしてるの？」

こないだのカフェと同じように彼女はフェイトの隣に立つ。違うといえは来ている服と立つか座るかである。

「あ、なのは。久しぶり…って程でも無いね」

…来たか…まあ、来るとは思ってたけどもう少しパーティーを楽しみたかったな…

「あの、なのはさん」

「っ!?!…どうかしたの?」

「…少しだけ外で話したい事があるんですけど」

「じゃあ外に行こうか」

そういうと少年の手を握る

「ごめんねフェイトちゃん。今は彼と話してくるよ」

「うん。待ってるから終わったら話し掛けて」

それだけ言うとなのははフェイトに軽く手を振りながら少年と一緒に外へと向かった。

――――

「嬉しいなー六課が解散して以来君に名前を呼ばれた事が無かったのに」

「やっぱり名前で読んでくれると嬉しいよ」

なのはと少年はパーティーが始まるまで少年がいた公園のベンチに座っている。座りながらもなのはは少年の手を握り締めており少年はそれに対して何も反応しない。

「それで話って何かな?」

名前と呼ばれたのが嬉しいのか頬を紅く染め、嬉しそうに笑いながらなのはは少年の顔を見つめる。

その目はカフェであったときとは違って光があり濁りなどない綺麗な目であり、前と同じように少年の目を見つめる。

：そうなんだ。こっちから近づけば変な事をしないんだ。きつと今から俺がすることは逃げることになるんだろう。でも、それでいい。

俺が逃げれば、何も起きないんだから：

「なのはさん、好きです」

少年の告白になのはは目を見開き驚く。

「え：？今好きって言った：？」

「はい、好きです。大好きです！！」

「ほ、本当に？嘘じゃないよね？」

「嘘なんかじゃないです。俺は貴方が大好きなんです」

：嘘なんかじゃないさ。

俺の事を大好きと言ってくれる人を嫌いなはずなんて無い。

ウソナンカジャナイ

「私もだよ、君のことが大好き」

そう言いながらなのはは少年に力強く抱き付く。

「もう放さないよ。誰にも渡さない。私達は恋人同士だもん」

「だから君は誰にも渡さないし、私以外の女と仲良くしちゃ駄目だよ」

「もし君が居なくなれば私、どうなるか私でも解らないんだから」

少年と顔を合わせながらなのは言う。
少しだけ濁った目で少年を見つめながら。

「ええ、貴方を裏切りませんよなのはさん」

「駄目だよ。なのはって呼んで」

「それに敬語禁止だよ」

「…ああ、わかったよ。なのは」

少年はそう言うとなのはに顔を近付ける。

なのはもその意味に気付いたのか目を閉じて顔を少年に近付ける。

2人はそのままキスをする。

なのはは大好きな人と結ばれた事を確認するために。

少年は自分が逃げたことを理解するために。

…これでいいんだ。

なのはさんみたいな美人の恋人になれるんだ。

悪い話じゃ無いじゃないか。

俺にデメリットなんて無いじゃないか。

…ごめん、ティアナ

なのはが少年から離れるとそのままパーティー会場の方を向き、少年の手を握る。

「ほら、パーティーに戻って皆に報告しよ」

なのはが歩き出す。

それに合わせるように少年も歩き出す。

2人でゆつくりとパーティー会場へと向けて歩いて行った。

――

あれからのこと、つまり俺が告白したあとの事について軽く話そう。

まず、パーティー会場では俺となのはさんが部屋に入ったら皆が拍手をして歓迎してくれた。

俺は何もわからずに呆然としていたがなのはさんはわかっていたのか俺に軽く説明してくれた。

どうやら、はやてさんに頼んでおいたらしい。

おそらくだがパーティーの時にははやてさんと話していたのはこのこと何だろう。

このパーティーが始まる前から：いや、もしかしたらカフェで会った時から彼女はこうなることがわかっていたのかも知れない。

：まあ、どうでもいいけど

後、拍手をしてきている人達の中にはティアナとスバルは居なかった。

後日聞いた話によると、はやてさんからこの話を聞いた時にティアナが出ていき、それを追い掛けるようにスバルも出ていったらしい。

パーティーが終わり、そのままそれぞれの場所へと帰った次の日俺に1通のメールが届いた。

なのはさんからのメールで内容は一緒に住もうという話だ。

俺はそれに賛成の言葉を送りそのまま仕事場へと向かった。

部隊長に会い初めに言われたのは違う課に配属になったという言葉だけで、自分の机の上には封筒が置いてあった。

まあ、新しい課というのはなのはさんのがいる処であり仕事内容もなのはさんのサポートというものだ。

これで俺は家でも仕事でも大好きなのはさんと一緒にいることができるのだ。

…全然嬉しくない
いや、そんなはずない
ソンナハズナイ

今日も俺はなのはと一緒に生活する。

何時もどうりだ。

ずっと傍にはなのはがいる。

何時もどうりに。

ずっと俺には選択肢がない。

いつもどうりだ

俺が何をしようとなのはが傍にいる俺が何を考えようと結果的には傍にはなのはがいる。

いつもどうりに。

何も変わらない。

変えられない。

変えてほしい。

でも、変えてはだめだ。

俺は逃げたから…

逃げたんだから…

だからしょうがないんだ

おれにはどうすることもできないから

病みつきなのは〜後日談〜（後書き）

これはハッピーエンドかな？

それとも、バッドエンド？

俺からしたらバッドエンドさ

この話を機に俺は口調を変えた

今の口調にね

そろそろその話もやるんじゃないかな？

まあ、この口調は隊長補佐君との差別化をはかるためでもあるんだけどね。

さて、次はどの話になるのかな？

どんな話を経てバッドエンドになるのかな？

楽しみだね

……楽しみだね

PS 今回の話は作者曰く黒歴史らしいよ。

黒歴史なら消せばいいのにね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6385x/>

病みつきなのはシリーズ

2011年11月27日18時53分発行